

# 中世後期の口語資料における 「ところで」の意味用法

馬 紹 華

## 1 はじめに

「ところで」は中世後期から近世初頭にかけて、原因・理由を表す接続助詞的な使い方を持つことが、ロドリゲスの『日本大文典』の記述によって知られている<sup>1</sup>。その他、靄岡（1972）、小林（1973）も「ところで」の原因・理由を表す用法について言及している。

靄岡（1972）によると、「ところで」は中世末から近世初めにかけて順接確定条件（いわゆる、原因・理由）を表し、近世になると、上方語でも江戸語でもその用法がなくなり、1880年代後半に逆接仮定条件表現として一般的に用いられるようになったという。靄岡（1972）は、「ところで」の前後に来る事柄は順接確定、逆接確定、順接仮定、逆接仮定など、さまざまな意味的關係に立ちうるのに、「なぜ中世末に「ところで」が順接確定条件を表わす用法だけを有していたのかは未だ詳らかではない」と述べている。

小林（1973）は、中世口語における原因・理由を表す条件句の中で「ところで」を扱い、抄物資料、キリシタン資料及び狂言資料における「ところで」の使用率と意味用法を考察した。小林（1973）によると、抄物資料及び懺悔録を除くキリシタン資料二文献における「ところで」の意味用法は、偶然確定条件に近いものもあったが、狂言資料では殆ど完全に原因・理由を表すものであるという。

中世後期の「ところで」の意味用法は大まか順接確定条件を表すと言えるが、しかしその使用実態は必ずしも明確とは言えない。本稿は、改めて中世後期の口語資料における「ところで」の意味用法を考察し、その使用実態を明らかにする。

---

<sup>1</sup> 『日本大文典』の記述では、「Tocorode（所で）はFodoni（程に）と同じく理由を示す。例へば、さやうに仰せらるる所で申されぬ、無い所で進ぜぬ等。往々文又は句の初に Tocorode（所で）だけ用ゐられたものは、かくして、これこれなのでといふ意を示す。例へば、所でこれこれ、云々。又は、した所で、云々。」（同 445）と記されている。

## 2 キリシタン資料における「ところで」の使用状況

キリシタン資料を代表する『エソポのハブラス』、『天草版平家物語』において（以下、『エソポ』『天草平家』と略す）、接続助詞的な「ところで」はそれぞれ 44 例、60 例が見つかる。特徴として、「ところで」の構文において前件の事柄と後件の事柄の間に場面性、因果性あるいは双方を読み取れることを指摘できる。以下、これについて詳細に述べる。

### 2. 1 『エソポ』の場合

上で述べたように、『エソポ』と『天草平家』の「ところで」の構文においては、前件の事柄と後件の事柄の間に場面性、因果性あるいは双方を読み取れる。この差異によって、「ところで」の意味用法に異なりが見られる。たとえば、『エソポ』における「ところで」の用法を細かく分類すると、次の3つに分けられる。

#### I. 物事が起こる場面を表す

I の場合は用例 (1) (2) に示すように、「ところで」は前件の事柄が起こる場面において、後件の事柄が生起することを表す。「ところで」は接続助詞のような用い方であるが、前件の事柄と後件の事柄は単に同じ場面において同時に起きた物事で、二つの事柄の間には特に因果性は存しない。よって、ここでの「ところで」の意味用法は単に物事が生起する場面を示すことで、原因・理由を表すことではないと考えられる。

- (1) それからエソポ風呂に行ってみるところに、その風呂屋の前に鋭な石が一つ出てあったが、出入りの人の足を傷り、疵を付けたを、ある人がかの石を取って、かしこに捨てたところで、エソポこれを見て、たち帰って、「風呂にはただ一人居まらす」と言うたれば、(エソポ・417・20)
- (2) ある馬に一段結構な鞍を置き、花やかにしてさいて通るに、驢馬の見苦しげなに重荷を駄せて、行き逢うたところで、かの乗り馬がこれを見て、「汝なぜに我を礼拝せぬぞ？只今われを踏み倒さうも余がままぢゃ」とゆゆしげにののしって過ぎたが、(エソポ・459・24)

(1) は、エソポは風呂に行く人の数を確認する場面を描いている。「ところで」はある人が風呂屋の前にあった人の足を傷つける石を取って捨てた場面を表し、その場面を見て、エソポは風呂にただ一人いるとシャントに報告したのである。(2) は、馬が重荷を背負う驢馬と路上で行き逢って、馬は驢馬を嘲ることを描いている。「ところで」は馬

が驢馬と行き逢った場面を表し、その時に馬は驢馬を嘲ったのである。このように、「と  
ころで」の意味用法は単に前件の事柄が起こる場面を提示し、その場面において生起し  
た事柄は後件で示される。つまり、この場合の「とところで」は「かしこに捨てた時に、  
エソポこれを見て」「行き逢った時に、かの乗り馬がこれを見て」のように時間表現の「時」  
に置き換えられることから、単に場面を示す意味しか持たないことが分かる。「とところ  
で」の前件の事柄と後件の事柄の間に因果性は読み取れない。

## II. 場面と契機を同時に表す

II の場合は、用例 (3) (4) に示すように、「とところで」は前件の事柄が生起する場面  
を表すが、一方で前件の事柄が後件の事柄の発生の契機にもなるように見える。上で考  
察したように、I の「とところで」の前件と後件の間には全く因果性は読み取れない。し  
かし、II の「とところで」の前件と後件の間には若干因果性が読み取れる。たとえば、

(3) 兩人ともに、「何でもあれ、存ぜぬことはない」と答へた。その時エソポかの二  
人の言ひ様を大きに嘲ったとところで、シャントエソポに問はるるは、「そちは何  
とした者ぞ？」(エソポ・413・15)

(4) その場に所の儉役が坐せられたに、驚一つ飛んで来て、かの守護の環を含んで、  
いづくとも知らず飛び去ったとところで、その座にあり会うた万民これを怪しみ、  
「これは只事ではない」と言うて、法会の儀式も興醒めて、各々このことを僉議  
するのみであった。(エソポ・425・19)

(3) について、エソポが二人の言うことを大きに嘲った時に、シャントがエソポに  
「そっちは何者だ？」と聞くと捉えると、「とところで」の意味用法は場面を示すことであ  
る。一方で、エソポが二人の言うことを大きに嘲ったことで、シャントの関心を引き、  
シャントがエソポに聞くと捉えることも可能である。この場合、前件の「エソポかの二  
人の言ひ様を大きに嘲った」ことは、後件の「シャントエソポに問はるるは、…」のき  
っかけになる。仮にエソポが大きに嘲ったことがなければ、シャントはエソポを気づか  
ないこともあるので、後件の「シャントエソポに問はるる」事態が起こらない可能性も  
あるだろう。このように考えると、(3) の「とところで」の前件の事柄は後件の事柄の契  
機になることが言える。

(4) についても同様なことが言える。「驚一つが飛んできた時に、万民がこれを怪し  
み…」と考えれば、「とところで」の意味用法は場面を示すことだと理解できるが、「驚一  
つが飛んできたことで、万民がこれを怪しみ…」と考えれば、「とところで」の意味用法は  
契機を表すことだと理解できる。上記の二例を通して、II の「とところで」の前件の事柄  
と後件の事柄の間に場面性と因果性の両方が読み取れ、よって、この場合の「とところで」

は場面を示すことと契機を示すことの両方の意味用法を持つと考えられる。さらに言う  
と、Ⅱの「ところで」の前件と後件の間には必然的な因果関係はなく、前件の事柄の発  
生がきっかけで、たまたま後件の事態を引き起こしたという意味で、小林(1973)は「と  
ころで」の用法は偶然確定条件用法に近いと言ったのであろう。

### Ⅲ. 原因・理由を表す

Ⅰの「ところで」は完全に場面を表すのに対して、Ⅱの「ところで」は場面を表す一  
方で、前件と後件の間に若干に存する因果性によって、契機を表すことも可能である。  
この二つに対して、Ⅲの「ところで」の構文においては前件の事柄から場面性を読み取  
ることが難しく、前件と後件の事柄の間に明確とした因果関係が存する。この場合の「と  
ころで」は場面を示すのではなく、前件の事柄が後件の事柄の原因・理由であることを  
示すと見られる。用例は次のものである。

- (5) ある時鼠のもとに蛙を招いて、種々の珍物を揃へて饗いたところで、その後ま  
た蛙も鼠を饗さうずるとて、招き寄せ、川のほとりに出て言ふは、「わが私宅は  
このほりぢゃ。定めて案内を知らせられまじい」とて、(エソポ・442・8)
- (6) (狗) その膝に上り、胸に手を掛け、口を舐りなどして、いと馴れ馴れしい体で  
あったによって、主人いよいよ愛せられたところで、驢馬この由を見て、羨む心  
が起こったか、「我もあのごとくにして愛せられう」と思ひ、(エソポ・451・9)

(5) は、鼠が蛙を種々の珍物を揃えてもてなしたので、その後、蛙は鼠を招待しよ  
うとしたのである。(6) は、狗が(主人の膝に上り、胸に手を掛け、…)主人に可愛が  
られたため、驢馬はこれを見て羨む心が起こって、狗の真似をしたのである。これらの  
例において、前件の事柄は後件の事態の原因・理由になっている。場面性の有無につ  
いて言えば、(5)の「ところで」は、前件の事柄と後件の事柄の発生には時間の隔たりが  
あり、前件の「鼠が蛙をもてなした」時に、後件の「蛙も鼠を饗さうずる」ことが生じ  
たではないので、「ところで」の意味用法は場面を表すことではないと判断できる。(6)  
については、前件の事柄から場面性を全く読み取れないわけではないが、しかし、前件  
の事柄が発生した時に、偶然に後件の事柄が起こるという意味関係より、やはり「狗が  
ますます主人に可愛がられたので、驢馬はそれを羨み、狗の真似をする」という因果関  
係を持つものとして解釈したほうが妥当であろう。

以下、場面性と因果性の有無によってⅠ、Ⅱ、Ⅲに分けた『エソポ』の「ところで」  
の用例数を表1にまとめる。

	I	II	III
場面性	+	+	-
因果性	-	+(契機)	+
用例数	25	13	6

表1. 『エソポのハブラス』における「ところで」の使用状況

表1について、「ところで」の意味用法において場面性もしくは因果性を含む場合は「+」、逆に場面性もしくは因果性を含まない場合は「-」で記す。これまでに述べたように、Iの「ところで」は場面のみを表し、原因・理由を表さないため、場面性は「+」、因果性は「-」となる。IIの「ところで」は場面と因果の両方を表すため、どちらも「+」となるが、ただし、IIの「ところで」が表す因果性は必然確定条件のような強い因果関係ではなく、前件が後件の契機となるようなやや弱い因果関係である。IIIの「ところで」は場面を表すのではなく、前件が後件の原因・理由となる必然確定条件用法を表す。場合によって前件の事柄から場面性を読み取れるかもしれないが、「ところで」の主要な意味用法は原因・理由を示すことであるため、場面性は「-」、因果性は「+」とする。

用例数から見ると、『エソポ』においてIの「ところで」の数が最も多く、IIの「ところで」はその次、IIIの「ところで」の数は最も少ない。Iが最も多いのは、「ところ」の本来の用法に最も近いからだと考えられる。つまり、「ところ」は場所を表す実質名詞から場面を表す形式名詞へ転じ、それに格助詞「で」が下接して、物事が起こる場面を表すようになる。このような用法は、形式名詞「ところ」から構成される関連形式の中では、「ところに」の成立が最も早い。中里(1995)は、中古から場面を表す「ところに」の形が見られると述べている。次は中里(1995)が挙げた「ところに」の用例である。

- (7) …あさましう、うちとけたること多くてあるところに、午時許に、「おはしますへ」とのゝしる。(蜻蛉日記・下)(中里1995:126(63))

「ところで」に関しては、場面を表す用法(すなわち、Iの「ところで」)は、「ところに」に遅れ中世後期から見られ始める。上で分析した「ところで」のI、II、IIIの用法の間にIからIIIへ移行する連続性が存すると考えられる。つまり、一つの事柄が発生する場面において、もう一つの事柄が同時にあるいは継起的に起こる場合は、大抵二つの事柄の間に契機性の存在が認められる。このことは、鈴木(1982)が論じた「間」の原因・理由用法の成立、及び吉田(2000)が論じた「ほどに」の原因・理由用法の成立の議論によって検証されている。両者の共通点はともに時間用法から原因・理由用法へ

転じたものである。その過程について、鈴木（1982）、吉田（2000）は「時間用法→時間・因果の双方→因果用法」のプロセスだと捉えている。

「ところで」については、元々時間用法ではないが、場面という意味の中に時間の要素が含まれ、前件の事柄が実現する場面において後件の事柄が成立するという意味から契機性が読み取れ、こうして場面用法から因果用法へ派生していくと考えられる。冒頭で、齋岡（1972）は、なぜ中世末の「ところで」が順接確定条件を表す用法だけを有していたのかは詳らかではないと述べた。「場面用法→契機用法→因果用法」のプロセスから見れば、「ところで」は場面用法から因果用法へ転じていくのが自然の成り行きであり、よって中世末の「ところで」は逆接確定、順接仮定、逆接仮定ではなく、順接確定条件を表す用法だけを有していたと考えられる。

## 2. 2 『天草平家』の場合

『天草平家』において「ところで」の用例が 66 例見つかり、そのうち場所を表す実質名詞の用法を除くと、接続助詞的な「ところで」は 60 例となる。『エソボ』の場合と同様に、『天草平家』の「ところで」はⅠ場面、Ⅱ場面・契機、Ⅲ原因・理由の3つに分けられる。ただし、『エソボ』に比べ3つに分けられた「ところで」は微妙に相違点があり、以下これについて述べる。

### I' . 物事が起こる場面・状況を表す

- (8) 少将泣く泣く手を合わせて喜ばれたところで、(宰相)「子ならずは誰かたど今わが身の上をさしおいて、これほどまでは喜ばうぞ?…」(天草平家・41・11)
- (9) 兼康下人に言うわ:兼康あまたの敵に向うて軍をして名を上げたれども、(中略)ただひとりある子を捨てたなどと言われうことわ恥ずかしいと言うたところで、郎等が返事にわ、…(天草平家・215・13)

(8) (9) の「ところで」の用法は『エソボ』における「ところで」の用法Ⅰと同じである。つまり、「ところで」は前件の事柄が起こる場面を提示する。この場合の「ところで」は(8)の「喜ぶ」、(9)の「言う」のような具体的な場面を描く動詞に下接することが多い。『エソボ』の用法Ⅰは殆どこれである。つまり「ところで」は具体的な物事の発生する場面を表す。

しかし、『天草平家』の場合は、(8) (9) のような具体的な場面を表すものがある一方、次の(10) (11) に示すように、「～状況の中で」という場面から抽象化した物事の状況を表すものもある。

- (10) 先陣わさうさうするうちに富士川のあたりにつけば、後陣はまだ手越のあたりに支えていたところで、大将維盛上総の守を召して、維盛が存ずるにわ、足柄をうち越えて、坂東で軍をしようと思われたれば、(天草平家・149・13)
- (11) 鏑矢のうちへ火をいれて、法住寺殿の御所に射たてたれば、折節風がはげしい吹いて、猛火天に焼けのぼって、炎わ虚空に満ち満ちたところで、軍奉行のかの鼓判官わ人より先に逃げた。(天草平家・222・6)

たとえば、(10) は、先陣は富士川まで進み、後陣はまだ手越に踏みとどまっている状況の中で、大将維盛は上総の守を呼んで話をした場面、(11) は、猛火が天に燃え上がった、炎は大空いっぱい広がるという状況の中で、合戦の指揮をとった鼓判官は誰よりも先に逃げたという場面である。(10) (11) の前件の事柄「踏みとどまっている」「炎は空いっぱい燃える」は、いずれも持続性のある物事であり、時間の幅を短く捉える「場面」の意味より、後件の事態は前件の事態の「状況」の中で発生すると理解するのが自然だと考えられる。仮に(10) (11) の「ところで」を「場面」として解釈し、「…踏みとどまっている場面で、大将維盛は上総の守を呼んで」「炎は大空いっぱい広がる場面で、指揮者が逃げた」という文が不自然になることが分かる。したがって、(10) (11) の「ところで」は物事が起こる「状況」を表すと考え、(8) (9) の物事が起こる「場面」を表す「ところで」より、さらに意味が一步抽象化したと思われる。ただし、どちらの場合でも「ところで」は「その時」として解釈できるが、これは「その時」という言葉は瞬間的な「場面」と持続的な「状況」の両方を指すことができるからである。

## Ⅱ' . 場面・状況と原因・理由を同時に表す

『エソポ』における「ところで」の用法Ⅱは、場面と契機の両方を表すことを上で述べた。『天草平家』においても、このような「ところで」の用法も見られる。ただし、『天草平家』の場合は、「ところで」は前件の事柄が発生する状況を表すと同時に、前件の事柄が後件の事柄の原因・理由になることを表す。たとえば、

- (12) 清盛も種々の祈禱、などをせられたれども、その験がなかったところで、鬼界が島へ流された少将の舅の宰相殿このことを伝え聞いて、重盛へ申されたは、中宮御産のおん祈りさまごまござるとも、非常の赦にすぐたことはござるまい存ずる、(天草平家・71・5)
- (13) 平家は讃岐の屋島にいられたれども、そつと歩をしなほいてあそここ四十四が国ほどきり従へてはびこらるところで、木曾はこれを聞いて、やすからず思うて、やがて討手をつかはいた。(天草平家・209・3)

(12) は、懐妊した中宮は体の苦痛に悩まれ、怨霊に取りつかれたと思われ、様々な祈禱が行われたが、効き目はなかったため、宰相が重盛に鬼界が島へ流された人の非常の赦を行うことを勧めた場面である。これについて、宰相が重盛に鬼界が島へ流された人の赦を勧めたのは、様々な祈禱は効き目がなかったからだという明確な因果関係が存することは明らかである。一方、様々な祈禱は効き目がなかった状況の中で（時に）、宰相が重盛に流された人の赦を勧めたのも事実である。よって、ここの「ところで」は状況を表す解釈もできる一方で、原因・理由を表す解釈もできると見られる。

(13) は、平家は合わせて十四か国を討ち取った状況の中で（ので）、木曾はこれを聞き、ほうつてはおけないと思ってすぐに討手を派遣した場面である。つまり、平家はすでに十四か国を討ち取ったから、木曾はほうつてはおけないと思い、すぐに討手を派遣したと捉えれば、「ところで」は原因・理由を表すものとなる。平家は十四か国を討ち取ったという状況において、木曾はほうつてはおけない…と捉えれば、「ところで」は状況を表すことになる。

この二例を通して、『天草平家』の「ところで」は『エソポ』の用法Ⅱ場面・契機用法のように、両方を表す用例がある。ただし、『エソポ』の場合は「ところで」の用法Ⅱは場面と契機を同時に表すが、『天草平家』の場合は「ところで」の用法Ⅱ' は状況と原因・理由を同時に表す。これは、契機用法というのは一つの事柄が発生したことがきっかけとして、偶然に他の事柄の発生を引き起こすという意味で、二つの事柄の発生時間に隔たりの短いことが要求される。よって、同じ場面において生起する事柄の間から契機関係が派生しやすいと考えられる。一方、原因・理由用法は原因となる事柄と結果となる事柄の発生時間に対して要求しないため、『天草平家』の「ところで」には状況と原因・理由の用法が両立するわけである。

### Ⅲ' . 原因・理由を表す

『天草平家』の原因・理由を表す用法Ⅲ' の「ところで」と、覚一本平家の原文との対応を見ると、原文において原因・理由を表す「ば」「あいだ」の箇所当たると、接続助詞がなく、二文に分かれているものがある。まず、前者については(14)(15)のような用例がある。

(14) 関白殿の御出とも言わず、一切下馬の礼にもおよばず、駆けやぶつて通らうとするとところで、暗さは暗し、しかしか入道の孫とも知らず、また少々は知つたれども、そらしらずして、(天草平家・15・8)

(15) 田にいくらもあつた雁どもも蘓武に見馴れて恐れなんだところで、蘓武これはみなわが故郷へ通うものぢやとなつかしさに、思うことを一筆書いて、(天草平家・69・2)



(14) (15) の覚一本平家の原文は、それぞれ「一切下馬の礼儀にも及ばず、かけやぶってとほらむとするあひだ」「蕪武に見なれておそれざりければ」であり、「あいだ」「ば」の箇所は『天草平家』において「ところで」に置き換えられたのである。意味は「いっさい下馬の礼をとることもなく、駆け破って通ろうとしたので」「雁どもは、蕪武に見なれて恐れなかったので」ということである。この二例の「ところで」の原因・理由用法は「あいだ」「ば」の意味用法を受け継ぐものである。

次に、『天草平家』において新たに挿入される「ところで」について見る。用例は(16)(17)である。この部分の「ところで」は上で述べたように、覚一本平家の二文を「ところで」によって一文に繋げるものである。簡単に言えば、覚一本平家では「A」「B」の二文が、『天草平家』では「ところで」が用いられることによって、「Aところで、B」のように一文となる。

(16) 三人切り伏せて、四人に当たるたびにあまり甲の鉢に強う打ち当てて、目貫のもとからちやうど折れて、川へぎぶと入ったところで、今は頼むところの腰刀でひとえに死なうと狂うた。(天草平家・74・10)

(16)′ 目貫のもとよりちやうど折れ、くツとぬけて、河へぎぶと入りにけり。□たのむところは腰刀、ひとへに死なんとぞくるひける。(覚一本平家・上311)

(17) ついには主従五騎になられた、五騎がうちまでも巴は討たれなんだところで、木曾殿の言われたは、我はただ今討死をするにきはまったに、そちは女なれば、一所で死なうことも悪しからうず、(天草平家・74・10)

(17)′ 五騎が内までもとゑはうたれざれけり。□木曾殿、「おのれは、とう／＼、女なれば、いづちへもゆけ。(覚一本平家・下178)

対照するために、『天草平家』の用例(16)(17)に対応する覚一本平家の原文(16)′(17)′を挙げる。(16)′(17)′の□の部分に注目すると、覚一本平家では□の前後の二文は間に接続表現がなく独立しているが、『天草平家』になると(16)(17)が示すように、「ところで」によって一文に繋がられていることが分かる。これらの「ところで」の意味用法はやはり原因・理由を示すことである。たとえば、(16)は「太刀の目貫のところから折れて、ぐいと抜けて川へ入ってしまったので、頼みとするのは腰刀だけ、一途に死のうと死にもの狂いで戦った」、(17)は「最後は主従五騎となってしまった、五騎のうちまでも巴は討たれなかったので、木曾殿は、自分は討死しようと思うのだ、最後の合戦に女を連れて一緒に死ぬことはよろしくないと言った」という意味である。

『天草平家』において、元々原文の「A」「B」二文を「Aところで、B」の一文に繋げる「ところで」の用例が多数ある。このような例は原因・理由を表す場合に限らず、

場面・状況を表す場合でも見受けられる。詳細は後述するが、ここで、『天草平家』における「ところで」の用法Ⅰ'、Ⅱ'、Ⅲ'の用例数を表2にまとめる。

	Ⅰ'	Ⅱ'	Ⅲ'
場面(状況)性	+	+	-
因果性	-	+	+
用例数	31 (14)	7	20

表2. 『天草版平家物語』における「ところで」の使用状況

表2について、用法Ⅰ'において場面を表す「ところで」は31例、状況を表す「ところで」は14例ある。両者を合わせると用法Ⅰ'の用例数は『エソボ』同様、最も多い。その次は原因・理由を表す用法Ⅲ'で、場面・状況と原因・理由の両方を表す用法Ⅱ'は最も少ない。これは、『エソボ』の状況と比べ、用法Ⅱ'の「ところで」は減少する傾向が窺える。『エソボ』の場合は、用法Ⅰは殆ど場面を表すものであり、場面性と契機性の曖昧さから両方を捉えられるものが多くあったと考えられる。一方、『天草平家』の場合は、用法Ⅰ'において状況を表す「ところで」が増え、状況と原因・理由の両立の難しさ、それから原因・理由用法の成熟に伴い、過渡期と見られるⅡ'の用例が減少したと考えられる。

『天草平家』のⅢ'における20例のうち、上に述べた「A」「B」の二文を「ところで」によって「Aところで、B」の一文に繋げるものが10例も占める。覚一本平家では二文となるものを、『天草平家』において「ところで」によって一文に繋げる箇所は多数ある。この現象は原因・理由を表す「ところで」に限らず、場面・状況を表す「ところで」の場合にもある。以下、これについて少し考察を加える。(18)(19)は場面・状況を表す「ところで」の用例である。

(18) 山路に日が暮るれば、けふはいかにもかなふまいとて、兵どもみな馬から下りて、陣をとったところで、武蔵房弁慶ある老翁を一人具して、義経のお前に参った。(天草平家・260・6)

(18)' 山路に日くれぬれば、みなおりゐて陣をとる。□武蔵房弁慶老翁を一人具して参りたり。(覚一本平家・下198)

(19) 宇治川の先においてはつかまつりつらうと思し召されいと、申して出たところで、参りあはれた大名、小名これを聞いて、荒涼の申しやうかなとささやきあはれたと申す。(天草平家・231・7)

(19)' 「…定て先陣はしつらん物をとおぼしめされ候へ」とて、御前をまかりたつ。

□参会したる大名小名みな、「荒涼の申様かな」とさゝやきあへり。(覚一本平家・下 166)

覚一本平家の (18)′ (19)′ の□の前後の文をみると、『天草平家』の (18) (19) は「ところで」を用いて二文を一文に繋げている。『天草平家』においてこのような「ところで」の用例数を用法別にまとめると、表3の通りになる。「A+B」の形式は原文の二文を一文に繋げる「ところで」のことを示す。

	I′	II′	III′	合計
用例数	31	7	20	58
A+B	22	6	10	38

表3. 『天草版平家物語』における「A+B」形式の「ところで」の用例数

表3に示すように、『天草平家』の「ところで」の用例数の中、半分以上が「A+B」形式の「ところで」であることが分かる。これは、「ところで」が接続表現として発達することを裏付けていると考えられるが、一方なぜそうなったのかを考えると、覚一本平家は和漢混交文で書かれた文語体であり、『天草平家』は中世後期の話し言葉で平家物語の概略を語るという形式を取って書き直したものである。物語を語る場合は、より臨場感を与えるために場面の描写が欠かせない。そのため、場所用法から抽象化した場面用法を表す「ところで」が多く取り入れられたのであろう。この影響は原因・理由を表す「ところで」にまで及び、その結果「ところで」は多く用いられるようになり、文と文を繋げる接続助詞の機能が一層強化されたのであろう。

### 3 抄物における「ところで」の使用状況

抄物における「ところで」は関西系、禅門カナ抄によって使用状況が異なる。関西系の抄物からは「ところで」の用例は僅かしか見られないが、禅門カナ抄からは「ところで」の用例が豊富に見つかる。以下、それぞれにおける「ところで」の使用状況を見ていく。

#### 3. 1 関西系の抄物における「ところで」

筆者が調べた関西系の抄物では、『中興禅林風月集抄』には「ところで」の用例が見つからず、『句双紙抄』には2例、『湯山聯句抄』には5例、『中華若木詩抄』から13例が

見つかる。その用例をいくつか下記に挙げる。

- (20) 隔心ナ人ニ出テヤウテハ面白モナイトコロテエノマヌ也。(句 43 オ 2)
- (21) 家中ニ入ランスル処テ、婦カ、古ノ夫ノ声ヲ聞知テ、(湯 6 オ 3)
- (22) 足ヲサシ出シテ、吾カシタウツラムスベト云タ処テ、カシコマリテ、ヲ、  
續タソ。(湯 46 ウ 9)
- (23) 今夜月明カ来ラヌ處デ雨ト知也。(中華二・ウ 13)
- (24) 我等ハ思ワヌ也ト申サル、処デ、景帝モ大息ヲツイテ、(中華二〇・オ 1)

これらの「ところで」は接続の面においては、これまでにみたキリシタン資料の「ところで」と同じように、動詞の連体形または完了の助動詞タに下接し、場面・状況もしくは原因・理由を表す。たとえば、(20) (23) の「ところで」は原因・理由を表すものであり、(21) (22) (24) の「ところで」は場面・状況を表すものである。

ところが、『蒙求抄』からは、従来の動詞の連体形、完了の助動詞タに下接する「ところで」の他、断定の指定辞「ゾ」を受ける「ところで」の用例も見つかる。(25)～(27)はそのようなものである。

- (25) クジカ出タゾ處デ臣下共カ今年バカリ代ヲ御モチアラウカト云。(蒙 37・9)
- (26) 総ジテコナタヘハマイリ候マイト云ゾ處テ三度マデ行ンタゾ。(蒙 40・10)
- (27) 盜ハセスト云ゾ處デハハカクレタ徳ガアラウゾト云ゾ。(蒙 254・7)

湯沢(1929)は(25)～(27)のような構文における「ところで」を接続詞として扱っている。一方、土井(1969)は断定を表す「ゾ」「ヂャ」「ダ」の類を受ける場合は、「あれども」「ほどに」なども同類であるが、まだ接続助詞と解することも可能であろうと主張している。確かに、断定の指定辞「ゾ」に下接することから、(25)～(27)の「ところで」を接続詞に考えても良さそうである。一方、(28) (29)のように、「ヂャ」に下接する「ほどに」は一般的に接続助詞だと認められることから、同様に(25)～(27)の「ところで」は接続助詞と解する余地があると考えられる。これだけで「ところで」の品詞性の判断は難しい。

- (28) 是ハ老馬ヂャホトニイサム気ガナイホトニドクリ／＼ト歩テユクソ。(中興禪林風月集抄 21 オ 11)
- (29) 人ノコトバト云物ハヤガテアトガナイ物ヂャホドニナンタル馬モエヲイツカヌゾ。(句双紙抄 7 ウ 5)

そこで、本稿は問題意識を変えて、なぜこれまでに動詞の連体形または完了の助動詞タにしか接続できなかつた「ところで」は、『蒙求抄』において(25)～(27)のような断定の指定辞を受けるようになったか、これは次節に述べる禪門カナ抄の影響だと見られる。

### 3. 2 禪門カナ抄における「ところで」

関西系の抄物から「ところで」の用例はあまり見られなかつたが、禪門カナ抄からは「ところで」の用例は豊富に見出される。『巨海代抄』には49例、『大淵代抄』には160例の「ところで」が見られる。本稿は、「ところで」の上接語に注目し、『巨海代抄』『大淵代抄』における「ところで」は「ト云」「ヨ」「デハナイカ」のような多様な形式に下接することが特徴的である。特に、「ト云処(處)デ」の形を取る用例が非常に多いことが目立つ。上接語別に、『巨海代抄』『大淵代抄』における「ところで」の接続状況を表4にまとめる。なお、ここでは「ところで」の接続状況を問題にするため、「ところで」の意味分類は行わない。

	a		b		c					終止形+ 処デ
	連体形+ 処 デ	タ 処 デ	ト云 処 デ		ヨ 処 デ	ダ 処 デ	ナ ン ダ 処 デ	ソ 処 デ	デ ハ ナ イ カ 処 デ	
巨海代抄	19	1	16	8	2	1	0	0	0	0
大淵代抄	71	21	32	23	1	8	1	1	1	1
小計	90	22	48	31	3	9	1	1	1	1

表4. 『巨海代抄』『大淵代抄』の「ところで」の接続状況<sup>2</sup>

表4に示すように、『巨海代抄』『大淵代抄』の「ところで」は上接語によっておよそa、b、cの三類に分けられる。a類は従来の動詞の連体形、完了の助動詞タに下接するもの、b類は「ト云」に下接するもの、c類はヨ・ダ・ソ・デハナイカ・ナンダに下接するものである。用例数から見ると、a類は圧倒的に多く、その次はb類であり、c類は最も少ない。この中で、従来のa類を除き、「ト云」に下接する「ところで」の用例数は非常に多いことが一目瞭然である。それぞれの用例を幾つか下記に掲げる。

#### a 類

(30) 武家ノ手ニ渡ル処デ早ヤ威光ハ尽タ事ダ。(巨・28・9)

(31) 其ノ血脈ヲ~~揉ム~~処デ過去ノ七佛ヲ山門頭デ礼拝シタ事ヨ。(巨・37・11)

<sup>2</sup> 「ところで」の漢字表記「所デ」「処デ」「處デ」を「処デ」で代表する。

(32) 五濁ノ浪モシツマツタ處デ露レタ珊瑚樹タ。(大・上 71・8)

b 類

(33) 荆棘林中息ノクサイ南方ノ佛法死路頭ヨト云處デ自恣ノ路頭モ聞エタ。(巨・78・6)

(34) 鼻孔ト云ハ修行ノ事ヨ修行在ル人ナラバ知郎マデヨトサシ放ライタゾト云處デ此語參得ノ人ハ心得ヨウズ。(巨・78・11)

(35) 今日佛法王法ノ祝シヤウダト云處デ黄龍ノ上堂ノ旨モ聞エヤフズ。(大・上 283・8)

c 類

(36) 爰デモ清風ノサツト吹タト云ハ萬法ヨ處デ本祖ヲ見デハサテ亦タ琵琶琴ヨリ沙汰ヲスル處デ爪音ノ高い人ハ聞エタ。(巨・51・6)

(37) 生死海ハソツトモタブヅカヌゾ處デ自己ノ心月モ本来空ニ當テ、(大・上 258・13)

(38) 寒夜ニ知音ノ訪イ羨ダ處デ二庵主共ニ只在リニ拳頭ヲ豎テタが、(大・下 95・6)

a 類は従来のもので、ここで、注目したのは b 類と c 類である。b 類は、(33) ~ (35) のように、指定辞「ヨ」「ゾ」「ダ」<sup>3</sup>の後に引用表現「ト云」が来て、いわゆる「ところ」では引用文を受ける形となる。c 類は (36) ~ (38) のように、「ところで」は直接に指定辞「ヨ」「ゾ」「ダ」を受けるものである。b 類と c 類の形の違いは指定辞と「ところ」の間に「ト云」が挟まれるか否かである。形式の上では b 類は引用表現「ト云」が脱落すれば c 類になるようにも見受けられる。b 類の「ところ」は接続助詞であるが、c 類のような「ところで」は接続詞として扱うべきか接続助詞として扱うべきか、湯沢 (1929) と土井 (1969) の間に意見が分かれていることを上述した。本稿は、『巨海代抄』『大淵代抄』をはじめ禅門カナ抄に見られる引用表現「ト云」に下接する多数の b 類の存在が、「ところで」の接続詞用法の形成と関係するのではないかと推測する。つまり、

---

<sup>3</sup> 禅門カナ抄に現れる指定表現について、『巨海代抄』の解題では、「「ダ」の数には遙かに及ばぬとは言うものの、「ゾ」「ヨ」の和が相当な数に達するという事実である」と記述されている。また、「ゾ」「ヨ」については、ロドリゲスの『日本大文典』の項目では、「主人が召使と話し、身分の高い者が低い者と話す時、注意を促す意味を持ってある」という解説がある。『巨海代抄』の解題ではこの解説を用いて、「ゾ」「ヨ」は「講義録の文体には極めてよく適合することばなので東西両抄物に多用されたのであろう」と述べられている。

従来の a 類の「ところで」は b 類のような形を経て c 類になり、結果として c 類の「ところで」は接続助詞であるか接続詞であるかという揺れが生じ、接続詞として解釈される余地ができたから、接続詞の用法の定着に繋がった可能性はあるではないかと考える。もちろん、「ところで」の接続詞の用法の成立について慎重に検討する必要がある、ここでそれを論じる余裕がなく、それに繋がる可能性について指摘することに留まる。

#### 4 虎明本狂言における「ところで」の使用状況

最後に、虎明本狂言における「ところで」の使用実態を見る。虎明本狂言において、「ところで」の用例は 97 例が見つかる。このうち、場面・状況を表す「ところで」もあるが、原因・理由を表す「ところで」は 67 例もあり、「ところで」は原因・理由を表す接続助詞として一般的に用いられていることを窺える。以下の用例において、(39)の「ところで」は場面・状況を表すもので、(40) (41) の「ところで」は原因・理由を表すものである。

- (39) 初雁を買ふと仰られう所で弐百疋と申てござる程に、弐百疋にとらふと仰られひ、(大名狂言類・雁盗人・169)
- (40) 間があらば才覚してやらふが、只今の事じゃ所で何共ならぬ。(髯類山伏類・ひつしき髯・341)
- (41) 高札の面につひて参つたと云ふ所で、芸は何が有ぞと問ふ。(髯類山伏類・八幡の前・383)

冒頭で述べたように、小林 (1973) は、キリシタン資料及び抄物資料二文献では、偶然確定条件に近い「ところで」もあったが、狂言資料ではそのようなものは少なく、大方は完全に原因・理由を表すものであると指摘する。これは、2 節で考察したように、キリシタン資料では場面性と契機性の両方に捉えられる「ところで」があり、偶然確定条件に近いと思われるが、虎明本狂言では場面性と契機性の両立ができる「ところで」の用例はなくなり、場面・状況用法と原因・理由用法を明確に判断できるようになったため、その意味で小林 (1973) は虎明本狂言の「ところで」は完全に原因・理由を表すものであると述べたのであろう。

虎明本狂言において、原因・理由を表す「ところで」が定着する一方で、接続詞であるものが僅かながら見られる。次の 3 例はその用例である。

- (42) 「何が是を見物いたさぬものはござるまひ」「所で、さだめて射損ふまでよ」(髯類山伏類・八幡の前・383)

(43) 後には面をかたはらへあてゝいる、所で、いや愛な、ぶつしじやと云、ぶつし、  
仏じやと云て、おい入。(出家座頭類・仏師・356)

(44) 「中々さやうに申さう」「所で、某よしにあまり、箸刀おつ取つて、紙をは三  
つに切り、二つを下におしおろし、(類集狂言之・118)

上記の用例において、「ところで」は独立して用いられ、特に(42)(44)の「ところで」は文頭に現れていることから接続詞である。ただし、これらの「ところで」は、(42)は「なので」、(43)(44)は「その場面で、そこで」の意味が示すように、現代語のような話題転換を表すものではなく、やはり場面・状況と原因・理由を表すものである。品詞性の変化と意味用法の変化は別の話であり、両者は並行して起こるとは限らない。元々接続助詞である「ところで」は、構文の中で接続詞に近い形になっても、意味が変わらないことは十分あり得る(3.2節で述べた禅門カナ抄のc類の「ところで」はこのケースである)。よって、(42)～(44)の「ところで」の意味用法は接続助詞「ところで」からの自然の繋がりだと思われる。

ちなみに、接続詞「ところで」の話題転換の意味が成立したのは、近代以降だと見られる。その頃、接続助詞の「ところで」は順接確定条件(原因・理由用法)から一般的に逆接仮定条件を表すようになる。靄岡(1972)によると、それは1880年代後半のことである。話題転換を表す接続詞「ところで」の普及はさらにその後ではないかと想定される。

## 5 おわりに

従来、「ところで」は中世後期において原因・理由を表すという指摘があるものの、その実態は明らかではなかった。本稿は、中世後期のキリシタン資料、抄物資料、狂言資料の一部を調査し、「ところで」の使用実態の考察を試みた。その結果、キリシタン資料から場面性と契機性の両方を読み取れる「ところで」が多く見つかり、それに基づき「ところで」の原因・理由用法の成立は場面性から契機性へ、さらに因果性へという過程を経たことを論じた。抄物資料においては禅門カナ抄の「ところで」をa、b、cの3つに分け、c類の指定辞「ゾ」などに下接する「ところで」は、b類の「ト云」が脱落してできたのではないかということ述べた。これによって、「ゾところで」の形において「ところで」に接続詞と解される余地が生じ、接続詞の成立へ繋がっていくのではないかということ述べた。狂言資料においては接続詞の「ところで」は見られるが、意味用法は「すると、そこで」といった順接確定条件用法の延長だと見られる。

本稿は中世後期の口語資料を中心に「ところで」の使用実態を考察したが、近世～近代になると「ところで」は順接確定条件用法から逆接仮定条件用法へ転じ、また接続詞



として話題転換の意味が生じる。今後、これらのことについても考察を続けたい。

### 調査資料

高木市之他校注（1966）『日本古典文学大系平家物語』岩波書店、大塚光信・来田隆（1999）『エソポのハプラス本文と総索引』清文堂、江口正弘（1986）『天草版平家物語対照本及び総索引』明治書院、来田隆（2008）『中興禅林風月集抄総索引』清文堂、来田隆（1991）『句双紙抄総索引』清文堂、来田隆（1997）『湯山聯句抄本文と総索引』清文堂、馬淵和夫（1983）『中華若木詩抄卷之上文節索引』笠間書院、福島邦道（1983）『中華若木詩抄』笠間書院、中田祝夫（1971）『抄物大系蒙求抄』勉誠社、駒沢大学文学部国文学研究室編（1973）禅門抄物叢刊『巨海代抄』『大淵代抄（上、下）』汲古書院、池田廣司・北原保雄（1972）『大蔵虎明本狂言集の研究』表現社

### 参考文献

鶴岡昭夫（1972）『『ところが』と『ところで』の通時的考察—その逆接仮定条件用法の成立時期をめぐる—』『国語学』88  
グループ・ジャマシイ他編（1998）『日本語文型辞典』くろしお出版  
小林千草（1973）「中世口語における原因・理由を表わす条件句」『国語学』94  
鈴木 恵（1982）「原因・理由を表わす『間』の成立」『国語学』128  
土井忠生（訳）（1955）ロドリゲス（著）『日本大文典』三省堂  
土井洋一（1969）松村明編『古典語現代語助詞助動詞詳説』学燈社  
中里理子（1995）『『ところが』の接続助詞的用法の発達過程について・（一）中古～中世前半』『学校法人佐藤栄学園埼玉短期大学研究紀要』4  
湯沢幸吉郎（1929）『室町時代言語の研究』大岡山書店  
吉田永弘（2000）「ホドニ小史—原因理由を表す用法の成立—」『国語学』203

**付記** 本稿は、華僑大学科学研究費補助金（華僑大学高層次人才科研启动項目資助 課題番号 60005—Z18Y0049）による成果の一部である。

（ま しょうか 中国華僑大学外国語学院講師）